

初年次実践教育の方法に関する研究

—千刈合宿を通した学びの検証—

川 島 恵 美 (人間福祉学部)

梓 川 一 (人間福祉学部)

岩 本 裕 子 (人間福祉学部)

要 旨

本論文の目的は、関西学院大学で実施されてきた社会福祉教育プログラムの中でも、1年次に開講されているソーシャルワーク実習入門という授業について「初年次実践教育プログラム」として捉え、今回は特にそのカリキュラムの3本柱の1つである合宿教育に的を絞り、その教育効果と今後の課題を明らかにすることである。研究方法としては、千刈合宿の中で学生が設定した合宿の「ねらい」をKJ法によって分類し、また学生が記入したふりかえり用紙の記述内容を質的に分析することにより、そのねらいがどの程度、どのようにして達成されたのかを探索した。その結果、「ねらい」としては大きく、①他者とのかかわり、②自己覚知と他者理解、③学びに対する姿勢の3つが見いだされた。それらのねらいは、日常生活を離れた合宿という場面で、他者（同期生、先輩、教員等）との協働やかかわりによる様々な体験を通して新たな気づきや学びを得るという形で達成されていることが伺えた。これらに対して初年次教育という枠組みで考察を行い、こうした要素が、将来社会福祉の領域で専門職として実践をするという狭い意味での福祉教育だけでなく、一人の社会人として生きていくためのスキルや心構えの習得という意味でも学習効果を持つという結論に至った。今後、科目全体について、また他科目との連動、初年次教育としてのアクティブラーニング等も含めての検討課題が得られた。

1. はじめに

関西学院大学における社会福祉専門教育は、1948年の文学部社会学科社会事業専攻としてスタートし、社会事業学科として独立、その後、社会学部、人間福祉学部へと発展しながら60年の歴史を刻んでいる。この長い歴史の中で特に大切にされてきたのが実習教育と呼ばれる、現場における実践的な体験を中心とした教育プログラムである。そこでは一貫して段階を踏んで本番の実習に備える教育プログラムが整えられてきた。現在においても、そうしたカリキュラムの構成を踏襲し、社会福祉教育が行われている。特に、1990年代頃より科目の中で、合宿が行われるようになってきた。教室での90分という限られた時間の中では行えないことを、宿泊を伴う長時間のプログラムの中で実施することで様々な教育効果があると考えられてきた。しかしながら、それは経験的なものであり、これまでこうしたプログラムについての実証的な研究が行われてきた

わけではない。本論文では、現在の人間福祉学部社会福祉学科において実施されている学年ごとに段階を追った社会福祉教育カリキュラムの中でも、1年次に実施されているソーシャルワーク実習入門（以下SW実習入門）という科目を初年次実践教育プログラムとして捉え、特にその3本の柱のひとつである千刈合宿について、学生のふりかえり用紙の記述を質的に分析することで、その教育効果を実証することを目的としたい。

2. 関西学院における実践教育の考え方

2.1 実践教育の歴史

前述したように関西学院大学では、1948年から社会福祉専門教育を行っている。学部、学科の変遷に従い、また1987年に制定された「社会福祉士及び介護福祉士法」による国家資格である社会福祉士、1997年に制定された「精神保健福祉士法」による精神保健福祉士の導入による教育プログラムの大きな変化を経て現在に至っている。時代にそった教育の特徴は以下の通りである^(注1)。

2.2.1 文学部社会福祉事業学科時代 (1948年～1959年)

1952年に文学部社会事業学科が設立された当時の学科長は、長年の米国留学の経験に基づき、長期間の実習の必要性を主張し、当初から実習教育を学科の重要な教育の柱とした。当時は、2年次から4年次までの3年間に渡り、1学年定員50名全員が必修で実習科目を履修していた。

2.2.2 社会学部社会福祉専攻時代 (1960年～1998年)

1960年に社会学部が新設され、学科制から専攻制となったことで、社会福祉の専門教育は3年次から選択制で行われることになり、実習科目も必修から選択制となった。この時代は、3年次に、学外実習の事前学習としての通年科目「社会福祉実習Ⅰ」を実施し、4年次に通年で学外実習に出るといった形であった。ちなみにこの、事前指導を経て通年実習を行う形態は「関学方式」と呼ばれ、後の社会福祉士養成課程における社会福祉援助技術演習のモデルとなった。

2.2.3 社会学部社会福祉学科時代 (1999年～2007年)

社会福祉学科は定員175名で、1年次から全員が福祉学科で学ぶことになった。すでに社会福祉士養成のためのカリキュラムが導入されていたが、1年次から演習教育を積み重ねる形となり、また合宿教育もこの時期から導入された。学外実習は4年次から3年次に変更となり、関学方式と呼ばれた通年実習は、社会福祉士の規定にとらわれないより専門的な位置づけである「アドバンスト実習」として4年次に配当された。

2.2.4 人間福祉学部 (2008年～)

社会学部社会福祉学科が分離独立し、さらにウィングを広げた形で人間福祉学部が新設され、社会福祉学科は3学科のうちの1学科として定員130名となった。人間福祉学部では実践の場とリンクした教育体制に重きが置かれ、福祉実習のみならず様々な現場と協力して行っていく教育を「実践教育」と総称し、それらをサポートする実践教育支援室という部署も設けられた。社会福祉学科では、従来の社会福祉士、精神保健福祉士の資格を持つ専門職を養成するためのソーシャルワーク実習教育に加えて、2013年度より、資格は目指さないが、福祉マインドを持ち市民的貢献ができる人材養成をもうひとつの柱として福祉社会フィールドワークという実習型のカリキュラムを設定している。またアドバンスト実習の流れを汲み、ジェネラリストとしての社会福

社士を第一段階として、よりスペシフィックな実践経験を積むための4年生実習が設定されている。

2.2 SW実習入門の位置づけと内容

2.2.1 SW実習入門について

SW実習入門は、1年次秋学期に開講されるソーシャルワーク演習Ⅰと並ぶ実践教育プログラムの第一段階と位置づけられる科目である。演習Ⅰは、毎回、テーマに沿ったワークの体験とその振り返りを行うラボラトリー方式の体験学習プログラムによる人間関係演習で、社会福祉学科生の必修科目である。これらの科目では、社会福祉の学びにおいて欠かせない「自己理解・他者理解」「自己や他者とのかかわり」「体験的に学ぶ」という基本的な内容を体験学習プログラムとして展開するものであり、実際の現場で、受け身の姿勢ではなく、主体的かつ能動的な学びの姿勢がとれるようにその基礎固めをすることがねらいとなる。以下はシラバスより抜粋した科目の特徴である。

授業目的：見学実習およびタウンウォッチングを通じて、実践教育を行う施設・事業者・機関・団体・地域社会等に関する現状把握を行い、基本的な知識を増進させ、現場に関するイメージを持つと同時に、合宿での体験学習を通じて実践教育に必要な人間関係における基本的価値や態度について学ぶこととする。

授業方法：合宿、見学実習、タウンウォッチング等の体験的な学びを柱とする。そのため、学生の主体的な参加を基本とし、その準備としてオリエンテーションや見学実習準備のための講義、また見学実習等のふりかえりのグループワークを行う。

このように、本科目は、①千刈キャンプ（関西学院の施設）での1泊2日の合宿、②将来の福祉実習先、フィールドワーク先となる施設・機関等の見学実習、③自分が居住する地域のタウンウォッチングが3本柱となるが、いずれも学生自身がその場に赴き、自分の身体、知性、感性を使って主体的に学ぶ必要のある内容となっている。秋学期始め頃の週末に合宿が、11月の週末と学園祭の休講期間に見学実習が設定されており、その前にはそれぞれのためのオリエンテーションが行われる。その合間に、タウンウォッチングの予行演習としてグループごとに学内を使ってキャンパスウォッチングを実施する。後半では、見学実習およびタウンウォッチングのふりかえりと分かち合いを実施する。これらは10人前後のグループに分かれて実施されるが、そのグループに2年生～4年生のラーニングアシスタント（以下LA）が付き作業やグループ活動を支援するという形をとっている。

2.2.2 合宿プログラムについて

ソーシャルワーク実習入門の千刈合宿プログラムの目的は、「3年次以降の実践教育科目履修に向けた準備として、合宿における集中的な体験を通して、①改めて社会福祉学科で学ぶ自分自身について考える、②仲間や先輩と交流し、自分自身の人とのかかわり方に気づく、③将来の実践教育につながる自分自身の学びの道筋を明確にする」となっている。合宿の1泊2日のセッションの内容は表1のようになる。

表1 千刈合宿 スケジュール

1日目			
10:00	JR 三田駅集合 バスに分乗し出発	20:30	ぶっちゃけフリートーク 先輩、仲間と交流 (自由参加) キャビンごとに順次入浴
11:00 11:40	千刈キャンプ到着 旗揚げ オリエンテーション	22:30	各キャビンにて就寝
12:00		2日目	
12:00		7:00	
13:00		7:30	
14:00		8:45	
17:00		12:00	
18:00		12:45	
19:00		14:40	
		15:30	

<オリエンテーション>

施設利用のオリエンテーション、合宿スケジュールの確認と心構え、諸注意のアナウンスを行う。

<セッションⅠ：自分とかかわる>

一人になってワークシートを記入。このワークシートは合宿の目的に従って自分の現状をふりかえり、更にこの合宿でどのように過ごすかを考えて各自の合宿のねらいをつくり、その後グループで各自のねらいの分かち合いを行う。

<セッションⅡ：仲間とかかわる>

大きな一重円になって手をつなぐところから始め、その円で番号をふって10人前後のグループに別れる。多くの場合、親しい者同士は近くに集まっているので順番にグループ番号をふることで未知のメンバーのグループができる。そのグループで、キャンプ場の5ヶ所に設定された課題ステーションを回る千刈オリエンテリングを行う。課題ステーションでは、LAがファシリテートを行い、グループの課題達成度、協力度などで点数をつける。各ステーションでは、課題の達成に際して協力、コミュニケーション、リーダーシップ、観察力などの要素が要求されるASE (Action Socialization Experiences) と呼ばれる活動を行う。全ての活動を終えたらふりかえり用紙を記入、グループで分かち合う。

<セッションⅢ：先輩とかかわる>

2年生から4年生のLA、また本学科卒業生の実習助手などがこれまでの自分たちの体験を話す時間。話し後はフリーディスカッションの時間となり、飲み物やお菓子も用意してざっくばらんな雰囲気先輩や教員とかかわることができる。

<セッションⅣ：実践教育とかかわる>

セッションⅡで共に課題を達成したグループに別れ、まず個人で今後の実践教育に対する

「期待」「不安」「課題」をポストイットに書き出し、グループ全員で共有化した後、KJ法によってまとめ全員の前でプレゼンテーションを行う。各グループにはLAがつき、話し合いや作業を支援する。

<まとめとふりかえり>

合宿中は、セッション終了ごとに、A4サイズ1枚を5分割した連続ふりかえり用紙にセッションを体験して気づいたこと、感じたことなどを記入していくが、最後にそれらを読み返し、改めて自分が設定したねらいおよび合宿のねらいに即した全体ふりかえり用紙を記入し、グループごとに分かち合う。

このように、合宿プログラムは、1泊2日の中に様々なアクティビティが盛り込まれており、学生にとってはかなり集中的な体験になっていると思われる。参加してよかったという感想を持つ学生が多いが、日常生活、日常の環境から離れた場所で、いつもとは異なる密度の濃い体験をする、つまり非日常の場面ではあるが、そこで起きていることは決して非現実ではなく、また、いずれにしてもどこかで一度は向き合う必要のあるテーマであることが、学生にとっての意義をもたらすことになるのではないかと考えられる。次項では、学生のふりかえり用紙の分析結果について述べていく。

3. 研究の方法

3.1 「ふりかえりシート」について

合宿では、参加者全員が、プログラムの一環として以下の連動した3種類のふりかえりワークシートを記入することとしている。

<自分とかかわるワークシート>

合宿の導入として、セッションIにおいて、自分と向き合い、今までのことをふりかえり、それらを踏まえて、合宿でのねらいを設定する。具体的には、①「今の自分の気持ち」を率直に書くことから始まり、②「社会福祉を学ぶ自分について」社会福祉学科に入学した理由、社会福祉の学びの中から感じていること、社会福祉に対する印象、コース選択とその理由を問い、これらを踏まえて、最後に社会福祉を学ぶ自分自身について、さらに今後の学びについて記入する。次に、③「合宿を始めるにあたって」、自分自身や仲間、先輩、教員それぞれに対して期待することを記入し、最後に、①～③を踏まえて、合宿に参加するにあたっての「私のねらい」を記入する。

<連続ふりかえりシート>

本シートは<自分とかかわるワークシート>と連動しており、ワークシートの最後に書かれた「私のねらい」を連続ふりかえりシート冒頭にそのまま再記入することから始まる。その後、各セッションが終わるごとにふりかえりを記入する。

<全体ふりかえりシート>

合宿の最終セッションの時に、最初に設定した「私のねらい」を踏まえ、その達成度と内容について記入する。さらに、「合宿のねらい」に即して、自分自身で社会福祉について考

えたこと、人とのかわりのあり方について考えたこと、実践教育に向けてこれから自分がしようと思うこと、その他に感じたことを記入することを通して合宿全体をふりかえる。

3.2 研究の対象と方法

本研究では、2014年10月10・11日に実施した合宿に参加した学生全員(103名)を対象とした。そこで参加学生が記入した上記のふりかえりシートのうち、<自分とかかわるワークシート>で作成された「私のねらい」と全体ふりかえりシートの「私のねらいの達成度とその内容」の欄、および「その他に、合宿に参加して感じたこと、学んだこと、考えたことなど」の欄に記載された記述内容をデータとした。記述内容は1項目ずつエクセルに転記して一覧できるようにした。

研究方法としてはまず、①「私のねらい」をKJ法により分類した。その後、②それぞれについて、「私のねらいの達成度とその内容」を中心に、「その他に合宿に参加して感じたこと、学んだこと、考えたこと」も視野に入れながら、これらのねらいが、どのようなプロセスを経て、どの程度達成されたのかについて検討を行った。

なお、ふりかえり用紙の活用については学生に今後の実践教育の研究に役立つ旨口頭で説明し、了解を得ている。また、一人ひとりの学生が特定されないよう、データの転記の際、学生番号、氏名は削除して分析を行った。

4. データの分析と結果

4.1 「他者との関わり」について(図1-1)

4.1.1 ねらいの概要

「他者との関わり」の設定とねらいについては以下のようになる。学生が記述したシートには、2日間の合宿に参加するスタート段階での率直な気持ちが表現されていた。

合宿には「行きたくない」「気が進まない」という心情で参加している学生、あるいは「単位取得のため」と割り切って参加している学生もおり、主体的・前向きな気持ちではない学生も少なからず参加している。

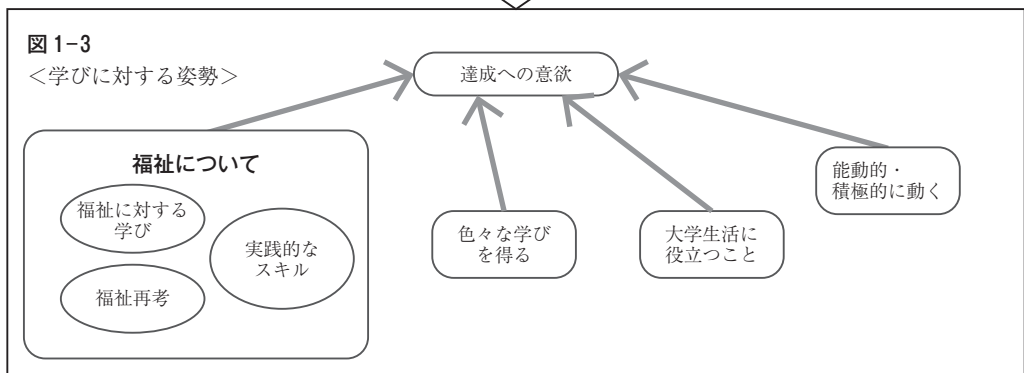
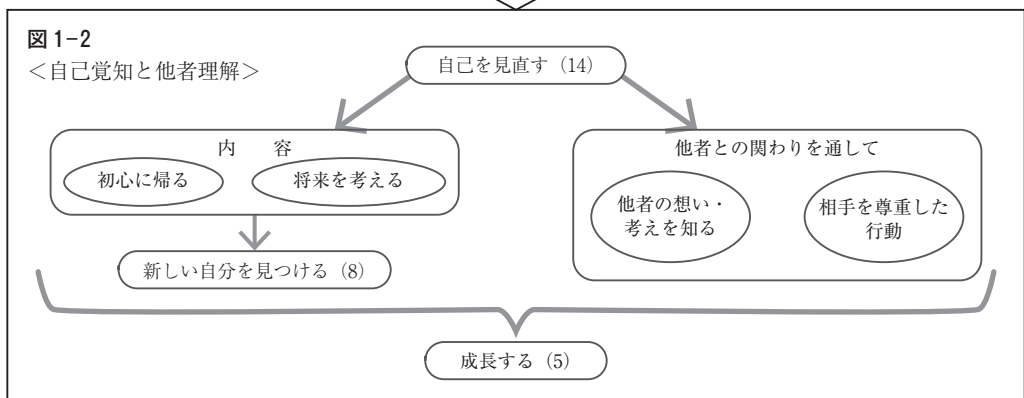
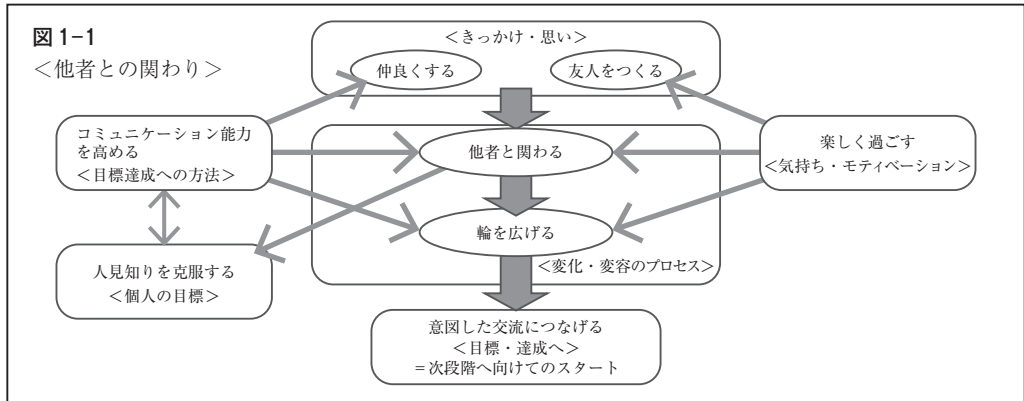
一方で、多くの学生は、合宿に参加したからには自分らしい目的意識をもって取り組もうとしている、あるいは、授業の一環として仕方なく参加した自分が、そこからどうすれば合宿への意味づけができるかを考えている。そして以下のように、友達になる・友人をつくる(=「初めて会う人と仲良くなる」「みんなと仲良くなる」)などの「私のねらい」(=きっかけ・思い)を設定している。

以上から、「学生の気持ち」「友人との関係性」に焦点をあて、学生自身の気持ちはどのように変化していったのかについて、主に「他者との関わり」から捉えることを第一のテーマと設定した。

4.1.2 ねらいが達成されたプロセスや結果

<きっかけ・思い>

合宿を始める段階において、友人といかに関係性をつくっていくか、その思いが表出されていた。主として「仲良くする」と「友人をつくる」という内容である。



まず、「仲良くする」では、「みんなと仲良くなる」「話したことない人たちと仲良くなりたい」「今までの友達ともっと仲良くなる」など、友人関係を広げていきたい思いがある。さらに「合宿を通して、相手のことをしっかり考え行動し、いろんな人と仲良くなりたい」のように、仲良くするためには自分はどうすべきかを考えている。

さらに「友人をつくる」では、「たくさんの人と友達になる」「学科のみんなと交流して友達を増やす」「同じ班の人とたくさんコミュニケーションをとって友達を増やす」のように、

合宿を通じて「友人を増やす」ことを主たる目的とした内容である。

<他者と関わる>

「思い、きっかけ」から他者と関わる行動につながる。例えば、「2日間一緒にいる仲間との関わりを大切に」「グループワークなどを通して、様々な人との交流を大切にしたい」「千刈キャンプに来たからには、たくさんの人と関わり、いろんな人と話す」「新しい場所で、色々な人と話しをして新しい発見をしたい」「あまり話したことがない人とも気さくに話せるようにする」「一人一人との関わりを深め、色々なことを吸収したい」「新しい交流の機会を存分に生かして初めて会った人とも素直に、気楽に関わっていききたい」などがある。キーワードとしては「関わり」「交流」である。そこには、どういう人と、どのような手段で関わりをもとうとしていくか、さらに、関わりを通しての目的も示されている。

<輪を広げる>

他者との関わりから、さらにグループあるいはチームを想定したねらいがある。「積極的に行動し、初対面の人ともたくさん関わり、輪を広げる」「友だちの輪を広げたい」「たくさんの人と交流して、人とのつながりを広げたい」「人との輪を今まで以上に増やし、喋ったことのない人と喋って仲良くなり友達の輪を広げる」「同じ学年の中で輪を広げていきたい」などであり、「輪」がキーワードになっている。

<意図した交流につなげる>

合宿のスタート時に設定した「私のねらい」には、自己変容のプロセスを期待して、合宿において到達したいという意図した交流(目標)も表現されている。例えば、「周りをよく見ることができる人になる」「後輩から元気と刺激をもらう」「周りに影響を与えられる人になる」「今後の職業選択を含めた自分のあり方を決める。そのために同じ社会福祉学科の仲間や先輩と交流し考えを深める」「自分の今を知り、仲間をお互い理解し合う」「みんなと仲良くなって互いに意識を高め合いたい」「自分がどういう気持ちでこの学部学科に来たのが再認識できるような合宿にしたい」「先輩達の経験を聞く」「人脈を広げ、資格をこれから取るという意識を向上させる」「福祉を学ぶ上での自分を見つめる」などである。これらには、社会人あるいは専門職を目指す自分を想定し、今後なりたい自分・なるべき自分を設定している。

以上の4つについては、他者との関わりにおける目標設定であるが、これら目標を実現するための具体的な方法・手段としてのねらいも示されている。

<コミュニケーション能力を高める>

千刈の自然環境という空間で、どのように取り組んでいくかの一方法として、コミュニケーション能力を高めることを挙げている。例えば、「いろんな人と関わってコミュニケーション能力を高める」「コミュニケーション能力と、集団の中の個人の行動をしっかりと身に付ける」「コミュニケーションを大事にする」「コミュニケーション能力を上げる」「友人、先輩はどのような心構えをしているのかを知る。コミュニケーションをとる」などがあった。コミュニケーションを一つのツールととらえて意思疎通を図り、新しい友人との関係性の輪を広げていき、また、人見知りで克服するためという個別の目標設定をする学生もいた。

<楽しく過ごす>

楽しむということ、もちろん「他者と関わる」「輪を広げる」ことにもつながるが、楽しむためには、ただ楽しめればいいのではなく、「守ることはしっかり守り、みんなとたのしく仲良く、楽しみながら、社会福祉に関する考えも深める」「みんなとよそよそしくじゃなく親しくしたい。楽しむ」というように、どうすればいいか、合宿（共同生活）における自己責任を意識している。さらに「みんなともっと仲良く、社会福祉学科にしかできない体験を分かち合って“つながり”を大切に作る合宿にする」「何をするために大学に来たのか、本当にしたいことは何なのかを思い出す。そして、楽しむ」にもあるように、楽しむことを通じて、どういう達成ができるか、合宿に対する意味づけもしている。

4.2 「自己覚知・他者理解」について（図1-2）

4.2.1 ねらいの概要

大きく「自分を見直す」ことをねらいにしている学生も多数いたが、そこからさらに、「初心に帰る」や「将来を考える」といった、「内容」を具体的にしている学生もあった。さらにそれに派生して「新しい自分を見つける」と設定している学生もいた。

また、「他者の思い・考えを知る」ことや「相手を尊重した行動をとる」こと等、「他者との関わりを通して」自分を見直そうとする学生もいた。最終的にこれらをとおして「成長する」ということに視点を持ってきていた学生もいた。

4.2.2 ねらいが達成されたプロセスや結果

<自分を見直す>

このねらいを設定した学生は、他の上位概念であることから、「今後の大学生活について見直すことができた」、「文にすることによって自分を見直せた」など、自己理解が促進されている。また、「振り返って見えてくる反省点がいくつもあった」、「人に勝手なイメージを持っていたことに気付いた」「主体的に参加することで、物事を色々な角度から見つめ直すという姿勢を学んだ」「自分もそうなりたと思った」といった、自分に不足するものや課題は何なのかについて気づく学生もいた。さらには、「やりたいことがいっぱいできた」、「自分だけが不安に思っているのかと思っていた悩みが、グループの人のお話を聞いて、同じことを感じている人がたくさんいたのでほっとした」というように、不安が解消されたり、モチベーションの向上につながっている。

<内容>

このねらいは2つに分かれる。1つは「何のために大学に来たのか」「自分がどういう気持ちでこの学部に入ったのか再認識する」ことや、「中途半端な状態を打破したい」といった「初心に帰る」ことをねらいにした学生で、これらについては先輩からのざっくばらんな話の中で、「本当にしたいことは何なのか思い出した」り、「福祉の仕事に対する考えが明るなものだと思えることができた」「みんながどのようなことに悩んだり、考えたりしているのかわかって、自分の安心につながった」「自分と同世代の子でそこまで考えているんだなど、驚愕した」というように、同学年と、先輩のそれぞれが影響を与えていた。

もう1つは、「未来のイメージを明確にする」「今後の学びに活かす」といった「将来を考

える」で、「セッションⅣ」のできごとを挙げている学生が多くを占めていた。「先輩や先生方に様々な細かく深いところまで教えてもらったことが良かった。…自分の進む道が見えた」、「実習について具体的な不安や希望を考えたことにより、これから取り組むべき課題を見つけることができた」「みんなと共に、はっきりとした具体的な今から取り組めることを考えられた」というようにすべきことが明確になることで、「不安が解消」でき、「より前向きな気持ちをもつことができた」としている。また、前述の「みんなと共に」という視点について、他にも、「グループで共有する時間が、他者の意見を取り入れ、かつ自分の意見を照らし合わせることができてとても良い勉強になった」といったものがあり、グループワークによる効果が表れていると同時に、それ自体が「グループワーク」というものに対する学びとしても受け止めている。

<新しい自分を見つける>

「自分に足りないところを見つける」「自分の人との関わり方を知る」といった「新しい自分を見つける」ことをねらいにした学生では、「みんなと同じじゃないといけないと思っていることに気づき、私は私らしくやろうと改めて強く思えた」「自分の弱点を認識したので、克服したい気持ちになった」というように、気づきのその先で、多くの学生が最後に前向きにとらえている。

<他者との関わりをとおして>

①相手を尊重した行動

「他者との関わりをとおして」のなかでも「相手を尊重した行動」をねらいにしている学生では、「周りに影響を与えられる人になる」とした学生では、「なるほど、それは新しい、と言ってもらえることが多かったので成功だった」や、「人と関わることの大切さに気付く」とした学生では、「どうやって話したり、コミュニケーションをとればいいかなと考えることができた」。「これからの学びを共に深めていきたい」とした学生では、「それぞれが福祉について、どのようなことに関心があり、どのようなコースに進むかなど話すことができたので、ねらいが十分に達成できた」と述べている。これらは他者との関係のなかで、自分が主体的に関わることによって自分自身が他者に影響を与え、与えられる存在であることやそれにより得るものが大きいことを実感していると言える。

②他者の思い・考えを知る

「他の人の思いを聞き、新たな気づきにしたい」学生は、「いろんな見方を通して福祉について見ることができた」と述べている。また、「人の様々な考え方に耳を傾ける」とした学生は、この実践を通じて「全体で課題も共有することで、新しいアイデアに触れることができた」と述べている。このように、他者の思い、考えを知ることをねらいにした学生は、他者の考えを知ることで、新たな気づきを得ている。

<成長する>

最後に、「成長する」ことねらいにした学生は、人と関わり、話すなかで、「先輩からたくさん吸収できた」「仲間とお互いに意見し合ったりしなが高めあえた」「文にすることで見直せた」とし、先輩や仲間との関わりをのなかで、また、それをワークシートで文章化することで成長できたとしている。

4.3 「学びに対する姿勢」について (図1-3)

4.3.1 ねらいの概要

この項目の中では、「能動的・積極的に動く」「まじめに取り組む」「いろいろなことを学びたい」といった合宿に対する態度や姿勢についてのねらい、更に、社会福祉についての学びを得ようとする内容が含まれる。社会福祉については「今よりもっと深く」「意欲高く」また「福祉に対する見方を再考する」といった、これまで何となくわかったようなつもりでいたことを考えなおしたり、見つめなおしたいというねらいが含まれている。更に福祉に特化したことばかりではなく、「大学生生活に活かせること」「人とのかわりや新たな知識を得る」ということを通して様々な達成への意欲につながるという結果となった。

4.3.2 ねらいが達成されたプロセスや結果

<達成への意欲>

この項目では、「合宿が終わった時に何か得られている」「参加してよかったと思える」「成長したと思える」「自分のものにできることを見つける」「自他共有意義なものにする」といったねらいが挙がっている。それらについて、「普段聞かない先輩や回りの学生の意見を聞くことで、自分のことを見つめたり将来について考えることができた」「積極的な議論をすることでグループにおける様々な役割の必要性がわかり有意義な合宿であった」「先輩の姿を見たり話を聞くことで、自分ももっと頑張ろうとやる気や希望が得られた」「積極的に話しかけ入学前に比べて意識が大きく変わった」といった記述があり、他者との様々なかわりを通して自分のねらいが達成されていることが伺える。

<能動的・積極的に動く>

この項目は、「積極的に学ぶ」「積極的にかかわる」「主体的に行動する」「前向きに取り組む」「意欲的に参加する」といったキーワードが多数挙がっている。その達成とプロセスについては、「実際に積極的に人とかわる」「話したことのない人にも積極的に声をかける」「自分から積極的にかかわれば相手も返してくれることがわかった」「今までより積極的に意見を言ったり行動した」「ワーク等の目標達成のために協力できた」「楽しくかつ真剣に取り組むことができた」といったように、いつもより一歩前に入る努力をしてそれが報われるという形での達成ができていることが伺える。一方、積極的に行動することをねらいとしていたが、結果的に、「自分から声をかけたのではなく、他者から話しかけられた結果かわりが増えたため、自分にもっと勇気が必要だと感じた」「人前で発表することの苦手意識を再確認した」など、もともとのねらいの達成ではないが、自分に不足するものに気づいたという記述をしている学生もいた。

<大学生活で役立つこと>

社会福祉に限らず、学生生活で役立つこと、大学での学びを明確にすることをねらいとしていた学生については、自分自身がサークルや部活など学内のグループに所属をしていないため先輩から話を聞く機会がもてず、この合宿での先輩の経験談が自分の不安解消や将来のイメージを描くことにつながったと記述している。

<いろいろな学びを得る>

ここで挙げられているいろいろな学びとは、「多くの知識を得る」「様々なことを吸収する」「楽しみつつ学ぶ」「学びたいことを明確にする」という表現で表されている。ねらいを設定した段階では、どちらかといえば漠然としたものだったことが伺えるが、その達成とプロセスを見てみると、「先輩や仲間との話を通じて、他の人の考えや思いを聞くことによって、実習のことについて、またそれ以外に将来のことについて理解できた」「自分がやりたいこと、自分の将来について見えてきた」「自分と向き合い、自分について考えるとともに相手を知り、接していくことの楽しさと難しさを感じた」等、この項目についてはほぼ全てが他者とのかかわりを通じて、具体的な形でねらいの達成が可能になっていた。

<福祉について>

①福祉に対する学び

この項目は、キーワードとして「(社会)福祉を(に、が)～」というフレーズが含まれるものとなっている。例えば、「福祉を好きになる」「福祉に必要な考えや気持ちを持つ」「社会福祉についての見方を変える」「福祉を肌で感じる」「福祉のことについて学ぶ」といったものである。この合宿では、社会福祉そのものについての講義や知的な学習の場面があるわけではなく、様々な体験を通じて福祉マインドの醸成に欠かせない人間関係や自己理解、他者理解などの基本に気づいてもらうことが中心になっているが、この項目にあるようなねらいを設定した学生は、「合宿で必要とされた団体行動やコミュニケーションが福祉にとって大切なことであることに気づいた」「やっていることは一見簡単でも、実は奥が深く難しいことを思い知った」「回りの友達の悩みや先輩の経験談を聞いて自分の進路について考えた」「社会福祉についてまだまだ知識が足りていないことに気づいた」という記述にあるように、本来の合宿の意図を多少とも感じ取り様々な学びを得ていることが伺える。

②福祉再考

この項目は、前述した福祉の学びに含まれるものでもあるが、特に、再考ということで例えば、「社会福祉を学ぶことをもう一度考え直したい」「福祉に対しての新しい考え方を見出したい」「社会福祉についてももう一度見つめる」「社会福祉に対する意識を今まで以上に深める」という表現に表されているように、社会福祉学科在学の自分が理解したり意識している社会福祉より更にそれを深めたり、再考しようとして設定されたねらいである。ねらいの達成度とプロセスを見てみると、この項目についても多くの友人や先輩と、普段とはまた異なる環境の中でじっくり話し合い、そのことを通じて社会福祉学科に在学し、福祉を学ぶ自分と福祉の関係性について様々な気づきを得たことが記述されている。特に、この段階では将来についての漠然とした不安を多くの学生が持っているが、それが自己開示され、共有化され、更に先輩の存在がライブモデルとなって、不安もあるがそれだけではない安心感が得られることから達成度や満足度の高さを伺わせる記述が多く見られた。

③実践的なスキル

意見のまとめ方やプレゼンテーションのスキルなど福祉にかかわらず一般的なスキルを身につけることをねらいとした学生は、他者のプレゼンなどを通して自分の課題をみつけられたと記述している。

5. 考察

本論の調査分析（KJ法）結果から浮かび上がってきた項目とは、確かにソーシャルワーカー養成教育において基本かつ必要不可欠であるが、それら内容はソーシャルワーク教育や社会福祉専門教育のみに限られたことではないだろう。

SW実習入門は、実践教育の入門科目であり、初年次の教育科目としても位置づけられている。科目としての目標は、3年生での実践教育（福祉実習やフィールドワーク）に向けて対人関係（自分・他者・グループ）の基礎を体験・体感しながら学ぶことにあるが、これら学びは卒業後の福祉現場において専門職として実践をするための基礎的な学びとなるばかりでなく、一人の社会人としてのスキルや心構えの習得に向けた学びでもある。つまり、この両者においては基本要素やスキルとして共通する点が多い。そこで初年次教育との関係性からSW実習入門の教育と学びを考察する。

5.1 初年次教育との関連性

濱名およびガードナーらによる「初年次教育」の定義に示される主たる要素をもとに、SW実習入門における教育内容を検証し、そこから本学科における初年次教育としての今後の位置づけについて考察する。

5.1.1 濱名の定義からの検証^(注2)

①新しい環境へのきっかけづくり

「高校からの円滑な移行」である。大学生の生活を始めるにあたり、様々な場面で新入生は多様な不安も抱えている。高校から大学へと新しい環境へ円滑に移行できるようにサポートすることは、教育の場面（講義・演習・キャリアデザインなど）において不可欠であり、初年次教育の役割としても重要であろう。

千刈合宿では、最初のセッションで設定する「私のねらい」は、本論の分析では3つに分類することができたが、その1つに「他者との関わり」がある。合宿を通じて学生は新しい友人関係づくり、先輩や教員との関係性づくりをテーマとして行動する。千刈合宿は、大学生活という新しい環境に向けて出会い・関わりのきっかけになっている。

②自己成長の実感

「人格的な成長」である。2日間の合宿で人格的な成長の達成は現実的には難しい。しかし、学生たちは仲間とともに各セッションに取り組み、その後、ふりかえりシートに「自分を見つめ直す」「新しい自分をみつける」のねらいに対する自己認識と自己成長の過程も表記している。例えば、他者の思いを知るという姿勢から「相手を尊重して行動する」自分、千刈の自然環境での体験を通して変容・成長を遂げている自分を、学生自身が体感しているのである。

③多様な体験から学ぶ

「社会的な諸経験」である。SW実習入門の核となる教育方法とは体験学習であり、体験の一つひとつが感化しうる教育成果・効果に注視している。SW実習入門の学びの柱には、千刈合宿の他に「施設見学実習」「タウンウォッチング」があるが、これらは学外という社会の中で現実的・体験的に学ぶことをテーマとし、特に施設見学では、施設内の入所者の社

会生活場面から学ぶ。千刈合宿では、自然環境の中で向き合う仲間・グループと共同・協調の姿勢で取り組むことで、今後の大学生活における貴重な社会的な体験となる。

④教育プログラムの検討

「総合的につくられた教育プログラム」である。千刈合宿における教育プログラムの内容と構成とは「①実体験から感じやすい・学びやすいこと、②各セッションで各チームが一体となって取り組む課題を設定していること、③各学生が具体的に状況や心理的な側面までふりかえることができること」を重視し、検討を重ねてきた。

さらに、教育効果を上げるために意図的に構成された体験学習プログラムおよびその内容として2つのポイントがある。第一に、毎年の教育効果を検証しつつ、本番の合宿前にはブレ合宿を実施することで、プログラム内容を綿密に担当者間で確認をすることである。第二には、予定された枠のなかにおさめるものでなく、自然環境下におけるダイナミックな実践・取り組みによって、各チームのメンバー相互の関係性から創造力・発想力が生まれ、ともに考えあう・感じあうことにより、達成できうる多様なワークを目指していることである。

しかし、「総合的につくられた」に関して、各学年の他科目との関連性をみるならば、1年生の秋学期科目のSW 演習 I との連動性は図られているものの、他科目間との総合的な観点から見た教育プログラムには至っていないのが現状である。

5. 1. 2 ガードナーらによる定義からの検証^(注3)

①大学生活から将来を見通す

「大学とはどういうところなのか」である。濱名の定義にもあるように、「大学生活について」を1年生に伝えていくことは初年次教育の根本的なテーマである。さらに定義には「将来の人生計画づくり」とある。これは大学生活から卒業後へとつながるものである。

本学科では2年生で「ソーシャルワークモデルまたは福祉社会モデル」(必修選択)に進むため、1年生秋学期に、コース選択から就職に至る、将来についての不安や悩みを抱えながら選択・決定をすることになる。そこでSW 実習入門には、学生の心理面あるいは教育面から支えていく内容も含まれる。例えば、千刈合宿では、入学前後に立ち返り、「大学・学部・学科に入学するきっかけ」「社会福祉を学ぶ動機」についてふりかえる。さらにLA との交流・直接的に向きあいを通して「これからの大学生活」について考えあひ、これからの自分・未来について思い描いていくことができる。

②自分と向きあう

「自己分析」である。千刈合宿では到着してすぐに、「私のねらい」をありのままの自分の姿で、今の気持ちを文字化して表出していくワークに取り組む。他人と相談するのではなく、時間をかけて(一人の世界で)自分と向き合い・自分を見つめながら、自分をわかろうとする。その後の様々なワークを経験し、ふりかえることを通じて、そこから自己評価や自己成長を確認することができる。その過程において新しい自分を見つけることもできるのである。

③他者との関わり

「人間関係づくり」である。合宿のセッションにおいて様々に取り組んでいくワークには、グループで向きあい・意見交換をし、自分の主張あるいは他人の意見を尊重することの大切

さを体験から学んでいる。そうした取り組みと学びのプロセスを通して仲間との関係ができ、人間関係が形成されていく。

④私のねらいの設定

「学習目標づくり」である。合宿において達成したい目標設定をすることに意味がある。そこにはモチベーションの維持・向上、達成への意欲、能動的・積極的に動くなど、学習・学びへの姿勢を自らが設定する重要性がある。加えて、目標設定から体験・取り組み、ふりかえりを通じて自己評価につながる一連の流れから自分を見つめ、変容・成長を認識・評価できることにある。

6. 今後の課題と提言

本論のデータ分析とその考察から、今後に向けて取り組むべき課題が明らかになった。提言として以下に挙げたが、これらはつながりをもって具体的・現実的に進めることが重要である。

第一に、SW 実習入門の位置づけの再検討である。1年次（秋学期）のSW 演習Ⅰと連動し、体験学習プログラムとして人間関係を学ぶ科目として、どのように初年次教育として位置づけることができるかである。そのためにはまず、初年次教育としてプログラミングできる内容について検討しなければならない。

第二に、初年次教育の充実に向けて、SW 実習入門科目の内容をカスタマイズする必要性があるのではないか。SW 実習入門としての学びの内容、それら内容の関係性と構成の再検討などがある。

第三に、他の科目との連動性に注視した上でのカリキュラムの見直しである。そのためには教員間の教科科目を通じての連携・協働体制の構築が前提であろう。具体的には、教員間の科目内容の共有化、教員間の意識の変革、教員間でのFDの取り組みが必要である。

第四に、大学4年間に通じる教育プログラムを設定することである。各科目間の学びのねらい・目標・内容を精査し、教育と学びにつながりを持たせる統合化されたプログラムが求められる。

第五に、これらの教育の方法論については、昨今提唱されているアクティブラーニングの考え方と共通するところも多い。例えば、能動的な学習、学生参加型の授業、LAの関わり・研修などである。これらは本学科のSW 実習入門ではすでに重要視しているテーマ・内容でもある。今後、アクティブラーニングの枠組みからも検討する。

注

(注1) 関西学院大学における実習教育の歴史については、川島恵美(2012)「『関学実習』の歩みと課題」、芝野松次郎・小西加保留(編著)、『社会福祉学への展望』(pp.218-233)にその詳細が述べられている。

(注2) 濱名篤(2007)「日本における初年次教育の位置づけと効果」『カレッジマネジメント145』(pp.6)において、濱名は、初年次教育を定義し、さらに「教育プログラムは、正規授業だけでなく、課外プログラムや行事・イベント、入学前プログラムなどの大学生活での様々な体験を含む」としている。

(注3) 1972年アメリカのサウスキャロライナ大学において、J・ガードナー他により「ユニバーシティ101」

という科目が開設され、誕生した教育プログラムおよび授業には「大学とはどういうところなのか」「人間関係づくり」「自己分析」「学習目標づくり」「将来の人生計画」「学習スキル」など、多様な初年次教育の教育内容が示される。